

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成30年08月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間環境学研究科

職 名・学 年 博士2回生

氏 名 テイラー・パメラ・マリー

助成の種類	平成 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	2018 Ohio State University Symposium on Social Psychology 2018年度オハイオ州大学院社会心理学のシンポジウム		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Agentic appraisals of fate during the emotion awe mediate the effect of vastness on cognitive accommodation Awe(畏怖・畏敬)感情における「運命性の認知」の役割: 壮大さの知覚と認知的調節の間の媒介要因の検討		
開催場所	アメリカ合衆国オハイオ州コロンバス市オハイオ州立大学のキャンパス、Pfall Hall		
渡航期間	平成30年07月26日 ～ 平成30年08月02日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃	177,345円
		鉄道賃	3,880円
		バス・タクシー代	3,000円
		宿泊料	36,876円
滞在費		30,000円	
	(上記助成金を充当)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要

京都大学院人間・環境学研究科 共生人間学専攻
博士2回生 TAYLOR Pamela Marie

【学会の概要】

今年度には、初めての Ohio State University Symposium on Social Psychology (年度オハイオ州大学院社会心理学のシンポジウム)が行った。このシンポジウムの目的は、メタ認知プロセスが態度の形成、変化、構造にどのように影響するかについての先進的な研究を発表し、アイデアを交換するものでした。2日間で8時から1630まで研究結果の口頭発表を行った。参加者はおおよそ70名（半分は教授、半分は大学院生・博士研究員）。行った口頭発表の数は、54だった。さらに、オハイオ州大学院の社会心理学研究科は世界には一級のランキングがついているので、多数の態度心理学の分野には有名な研究者も参加した（例えば、Richard Petty, Duane Wegener）。

聴衆が小さく、参加者間の距離が近い集会でした。そのため、簡単に他の研究者と出会い、情報交換をし、仲良しになって、今後の研究のコラボレーションの可能性を話し合うことができ、優れた機会でした。確かに、他の大きいな学会（例えばSPSP）にも海外で活躍する学者と出会う機会はあるけれど、その学会の人数が多くてじっくりと話し、互いの研究（方法、結果、理論など）について理解を深めるほど深く話しの機会が珍しい。そんな大きい学会と違って、この小さい集中シンポジウムはネットワーキングを簡単にできる。

【参加・発表成果】

本シンポジウムのテーマは態度の変更だったので、全ての発表内容は態度に関連でした。その態度心理学について理論とか研究方法とか結果を幅広く扱っており、様々な研究発表を聞くことができました。最新の研究成果について聞くことで研究に特に有用な情報を受けることができました。また、私の研究に関する発表は、発表の後で、気軽に発表者に質問させていただくことができ、多くのことを教えていただいた。

私はシンポジウムにおいて “Agentic appraisals of fate during the emotion awe mediate the effect of vastness on cognitive accommodation” [日本語の翻訳は、「Awe(畏怖・畏敬)感情における「運命性の認知」の役割：壮大さの知覚と認知的調節の間の媒介要因の検討】というタイトルで口頭発表をおこなった。この発表では畏怖・畏敬の念（理解出来ないほど大きな知覚的壮大さで誘発させ、その壮大さに認知的調節の必要さを悟らせる感情）における「運命性」の原因帰属の影響について発表した。具体的に、壮大さがスキーマ変更に及ぼす影響は運命性の知覚によって媒介されていた結果を報告した。発表の後、聴衆から聞いた質問を答えた。しかも、シンポジウムの残り時間には（例えば、休憩の時にも、晩御飯の時にも、最後の日の翌日に空港で便を待つ時にも）様々な研究者とお互いに発表について話し、様々なコメントとか質問とか助言をいただくことができました。いただいた助言やコメントのおかげで、今後研究を発展させられるアイデアがたくさん、は現在執筆

中の論文の内容を向上させる上で大変役立っている。自分自身の研究を改めて見つめなおす良い機会となった。

この集中的な小さい学会には、朝食も昼食も晩御飯をみんな一緒に時間過ごした。その時間をつかって研究者間の交流を広げる良い機会となっていた。その中でも大切だと思うのは2日間という期間、同じ時間（シンポジウムだけじゃなくて）みんな一緒に話をすることができ、お互いの研究とか大学の環境などについて新しい友達として話をする大変良い経験になった。また機会があれば是非この学会に参加したいと思う。

【謝辞】最後に、本助成を受けたことにより、国際会議に参加し、大変有意義な研究交流を行うことができた。この助成金をもらわなかったら、このシンポジウムに参加することはできなかった。京都大学教育研究振興財団のおかげで、研究の結果を他の研究者に教えられて、新しいアイデアができて、今後はこのシンポジウムに出会ったアメリカの研究者と2つのコラボレーションの機会もある。誠に京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。